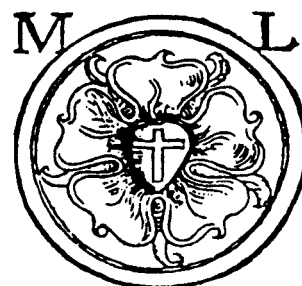


ルター 新聞

ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr. 80

Die Luther Zeitung



80号記念と

徳善義和先生追悼



「ルター新聞」テスト版 0号
(1985 年 7 月 5 日発行)

0号から10号までルターの生涯が新聞記事風に、
第一面をかざっていた

今号は、「ルター新聞」八〇号記念号である。ルター研究所は、一九八五年一〇月に開設されたが、その年さつそく本紙は刊行された。ルターとルター研究所のことを広く知っていただくために、原則年に二回、刊行されてきた。そして今号で八〇号をむかえることとなったのである。実は一九八五年一〇月発行の第一号の前、七月にテスト版「〇号」が発行されている。今や幻の〇号である。上段をごらん下さい。

一月三日、ルター研究所初代所長の徳善義和先生が天に召された。研究所開設以来、わが国のルター研究の第一人者として、研究所の運営、ルターの翻訳・研究、そしてルター神学の啓蒙・教育のために、類まれな指導力を発揮してこられた。改めて想い返せば、今日まで日本のルーテル教会の牧師も信徒も、言うなれば「徳善先生のルター」を学んできたのである。今号は徳善義和先生の追悼号でもある。

今号の内容

- 2面 徳善先生のルター研究
- 3面 徳善先生の思い出
- 4面 徳善先生の本の紹介
- 5面 徳善先生の本の紹介
シリーズ「人間ルター」⑮
～お喋りな人ルター～
- 6面 ルターのことは
切手に見るルター③⑥
- 7面 シリーズ
「ルターとバッハとわたし」
クリスマス講演会報告
- 8面 研究所ニュース

追悼

徳善義和先生のルター研究

所長 江口 再起

徳善義和先生は、一九三二年にお生まれになり、二〇二三年一月三日に天に召された。九〇歳のご生涯であった。

まず簡単に学歴・職歴等を記しておこう。先生は、中学生の頃、羽村教会に通われ、一九五一年、東京教会で本田伝喜牧師より受洗。五年東京大学工学部卒業。五六年立教大学修士、五七年日本ルーテル神学校卒業。六十年ハンブルク大学留学。七一年ハイデルベルク大学在外研究。九二年神学博士（米、ワルトブルク神大）。

職歴を記せば、一九五七年日本福音ルーテル教会伝道師。五九年教職按手。五八年より日本ルーテル神学校・大学で神学教師（約四十五年間）。八五年ルーター研究所創設、所長（一七年間）。九八年神学校校長。二〇〇二年定年。

その間、牧師不在等の教会のために、稔台、大岡山、田園調布、むさしの教会の牧師として、それぞれ一二年、牧会の任につかれた。

またその働きはルーテル教会内だけでなく、広く国内・国外のキリスト教界全体に及んだ。エキュメニカルな働きである。東北アジア神学校連合会会長、日本キリスト教協議会（NCC）議長、日本エキュメニカル協合理事長、ルーテル・

ローマカトリック神学対話国際委員会委員等々。

上記からわかる通り、先生は牧師、神学教師、そして何と言ってもルーター神学の研究者であった。もう少し言葉を足せば、先生は一貫して、教会につかえる牧師・神学教師として、ルーター研究に生涯をささげられたのである。

さて、ではいかなるルーター研究をされたのだろうか。ルーター研究と言っても、様々な傾向がある。思想（史）に関心のある研究、文献学や歴史が中心の研究、そして教会に軸足をもつ研究。それぞれ思想型、文献学型、教会型と言えよう。もちろん、どの傾向がよいというのではない。それぞれ研究者は自らの全生涯の実存（信仰）をかけて研究しているのである。

その中で先生は、はつきりと教會的ルーター研究であった。どういふことか。先にも記したように先生は、教会につかえる牧師・神学教師としてルーターを研究された。ルーターのルーターたる由縁は、「教会」に具現化された「信仰」の生にある、と捉え研究したのである。もう少し説明すれば、ルーターの真髄は、何をいってもまず第一に神の働き、そして第二にそれに応答する人の生き方、という所にある。その全体を称して信仰というのであり、そこに教会も成り立つ。ルーターはそこに立っていた。「我ここに立つ」。これがルーターの肝であり、先生に学んだ神学生はそこをたたき込まれた。私もそう

である。つまり、ルーターは単に勇気ある改革者ではない。むしろ彼はなぜあれほど勇気ある改革者であったのか、と問うべきである。答えは、神の導き（恵み）である。人の力ではない。

より具体的に先生の力説した論点の一つを挙げてみよう。礼拝のことをドイツ語で Gottesdienst としう。Gott は神、Dienst は奉仕。ともすると礼拝は我々人間が願ひ事をもつて神様に奉仕する時と理解されるが、それは違う。逆である。神こそが我々人間に奉仕（恵みをもつて守り助ける）して下さる時こそが礼拝というものであり、それに応答して人がささやかながらお礼を申し上げる、そしてその現れとして隣人に奉仕する。これが礼拝（Gottesdienst）にあるという事を、先生は事あるごとに語っておられた。ここに先生のルーター理解が生きている。

先生は実に多くの仕事をされた。まず翻訳。『ルーター著作集』には先生の手になる多くの翻訳が収録されている（この世の権威について、「人々は子どもたちを学校へやるべきであるという説教」、「マルブルク条項」等々）。なかでも大部のルーターの聖書講解『ローマ書講義』、『ガラテヤ大講解』の翻訳はその白眉である。またザ・ルーターともいえる『キリスト者の自由』は五度も改訳された。いかに先生がこの書物に打ち込んでおられたかがわかる。その他、ルーテル教会信条書『一致信条書』等々。

著作、論文、エッセイについても枚挙にいとまがない。多くの方が、時に重厚な時に軽妙な徳善義を味わわれ教えられたことであろう。ここでは先生の代表的な著作三冊を挙げておこう。まず『キリスト者の自由―訳と注解―』（教文館）。ルーターの一語一語を吟味注解していく。絶対必読。次に『マルチン・ルーター―生涯と信仰―』（教文館）。ルーターの伝記である。もともとはラジオ放送に基づいているため、ルーターのことがつぎつぎ頭に入ってくる。ある若いルーター研究者から、この本を読んで初めてルーターのことになったと伺ったことがある。そして三冊目は岩波新書の『マルティン・ルーター―ことばに生きた改革者―』である。岩波新書は教会内だけでなく実に多くの人が手にとる我が国の学問水準の基盤をつくるシリーズである。「ことばの人ルーター」を軸に叙述されていく。今後ルーターを学ぶ人は恐らくこの書物をまず読むのではなからうか。

この三冊以外にもう一冊挙げたい。先生はバッハをこよなく愛された音楽愛好家であったが、ルーターも言うまでもなく賛美歌の大家であった。先生は宗教改革五百年の年、二〇一七年に『ルーターと賛美歌』（日本キリスト教団出版局）を出版された。この書物が最後の著作となった。先生の私たちへの最後のプレゼントである。

*なお、四冊の著書のより詳しい紹介は、四面・五面をご覧ください。

徳善義和先生の思い出

石居 基夫

徳善義和先生は一九五八年に非常勤、六四年からは専任として神学校で教え、四五年間にわたって現役で神学教育を担ってくださった。就任当時はまだ鷺ノ宮に神学校があった時代。職員住宅にお住まいだった。そして、私の父も神学校教員であつたため、やはり職員住宅に住んでいたが、ちょうどその頃ご子息と遊び友だちだった私にはやさしい徳善のおじちゃんだった。夕方家に戻って来られると、面白いことを言つて子どもたちを笑わせてくれ、ひよいと抱きあげる先生の腕の毛深い巻き毛は、意外なほど柔らかだった。神大が移転した六九年からは、私の一家も三鷹のキャンパスに移り、徳善先生とは文字通りのご近所（三階と四階）となった。

そんな関係が大きく変わることとなつたのは、私が神大に編入学をした時。「これからはもつちゃんではなく、石居くんと呼ぶからね」とけじめをつけて、出版したばかりの『キリスト者の自由、全訳と吟味』をいただいた。『アウグスブルク信仰告白の解説』と共に神学生には必読の書。よく準備された歴史神学の講義は、そのまま出版されて良いほどに整えられたものだったが、ノートから目

を上げて話される時には、あたかも目の前にルターその人を見ているかのようで引き込まれ、講義は学生の信仰の養いともなった。

早朝四時には起き、定時にルター翻訳に取り組まれていた先生は、夜の八時にはお休みになる。牧師になつて勉強する時間は、「誰にも邪魔をされない朝一番がお勧め」と教わつた。膨大な翻訳の仕事は、こうして「朝飯前の仕事」だったそうだ。

卒業後、牧師となつたばかりの私をFEBICのラジオ番組のお相手役や、教会の信仰と職制委員会の書記として用いてくださった。たりしたが、未

熟な私への継続教育だったと今にして思う。

私が留学するときには、後任が決まるまでむさしの教会の責任を引き受けてくださった。生涯一牧師であることを旨とされ、神学教師であること以上に牧師の仕事を受愛された。

尽きない思い出。今頃、天国でルターに色々と質問されているだろうか。感謝しかない。

(所員 ルーテル学院大学学長)



徳善先生のこと

湯川 郁子

「今日、僕は初めて電車で席を譲られたよ。えっ僕に？ ありがとう、と座つてきたよ」と、勢いよく入つてこられた様子が今も目に浮かぶ。ルター原典講読会は、徳善先生が隔週木曜の夜、三鷹の神大から市谷ルーテルセンターまで遠路出張さ

れ、二〇年余り続けてくださった。毎回、誰かの試訳の後、先生が一度ですっきり頭に入る訳をくださる。年ごとに別の書

を取り上げて解説も加えられた。『キリスト者の自由』の年は特に参加者が多く、「これを読むのが私の一生のしごとでした」と語られ、年度終了後すぐに逝かれた方もあつた。土曜日の神大での講義（「ルターの神学」など）にも熱心な聴講生のお顔が多かつた。お母さまと

ともに全出席だった崎村ナナさんも、先日の先生の訃報に、徳善先生訳によるルターの讃美歌を聞きながら涙ぐんでおられたとのこと。ルターゆかりの地を訪れ

るルターセミナーの折には、時を超えていま、「歴史の現場に立つ」意義を語られた。どれほど多くの人々が先生を通じてルターの心に触れる恵みを得たであろうか。

セミナーの世話役をいつも引き受けてくださった阿部光成氏を通じて、私は無教会今井館での先生の講演にも与つた。最後にうかがつたルター最晩年の詩編九〇編講解からのお話は、特に心に残る。「律法は、生きている時こそ死を覚えよと教えるが、人は死に臨んでは、死のさなかにあつても、生の内にあるという、福音の声を聴いて慰められる。我々は神を住みかとしているから……」と。歴史の激流にありながら、一つひとつの賜物に感謝しつつ、思索ではなく、日常の具体的ないのちの中で信仰を生きぬいたルター。ルターの真髄を分かりやすく説いてくださった徳善先生は、ルターを通して、今、ここで生きる私たちの信仰の姿勢を、また未来へ向けての指針を与えてくださった。晩年は目のご不自由のなか、説教に講義に執筆に翻訳に、また長年にわたるカトリック教会との対話に、広く深くお働きくださいました先生、ありがとうございました。

(研究員 JELC 市ヶ谷教会員)

徳善先生の本の紹介

『マルティン・ルター——ことばに生きた改革者』

(岩波書店、二〇一三年)

二〇一二年に出版されたこの新書は、副題に「ことばに生きた改革者」とある通り、マルティン・ルターの生涯の中でも、とりわけ言葉に、また聖書に対する向き合い方に焦点が当たっている。しかし、新書という広く一般に向けての本であることを念頭に置いて執筆されており、専門知識が無くても読み進められるよう、分かりやすい言葉と構成でまとめられている。ルター（ルーテル）といえ、ルーテル教会の名前にもなっており、教会で馴染み深いだけでなく、教科書にも載っている一般的に知られた人物でもあるが、実際にどのような生涯を送り、どのような業績を残したかは意外に知られていない。ルターがどのような背景を持って育ったのか、どのような動機から「九五ヶ条の提題」に至ったのか、そして、その後の聖書翻訳や著作にはルターの言葉に対する向き合い方がどう反映されているのかが、時代状況も合わせて簡潔に解説されている。特に、聖書翻訳については著者の言語に対する造詣の深さが現れており、またルターの神学を語る上で欠かせない用語「神の義」について明瞭に理解できるようになっている。讃美歌などの音楽や家族との関わりについても述べられ、ルターという人物がとても身近に感じられる一冊である。ルターの入門書として、これからも多くの人たちに読んでほしい。

多田 哲（研究員、JELC 水俣教会牧師）



『キリスト者の自由——訳と注解』（教文館、二〇一二年）

本書は、徳善先生の代表作である。「キリスト者の自由」はルターの宗教改革三大文書の一つだが、先生はこの著作を何度も翻訳し直し、講義された。この名著の一文一文を丁寧に吟味注解されたのが本書である。一九八五年に『キリスト者の自由 全訳と吟味——自由と愛に生きる』として新地書房より出版されたが、現在は教文館より出版されている。

先生の大きな功績は『ルター著作集』の多くの翻訳であるが、ルターの神学に対するご自身の解釈を展開されたことも忘れてはならない。ルター神学は「静寂主義」と批判を浴びることがある。行動することに消極的であるという他教派からの皮肉であるが、ナチスに抵抗することやほとんどなかったドイツのルター派教会がそう批判を受けたのである。「行いではなく、信仰による義」（ロマ三・二八）を強調したルターの信仰義認論が誤解され、行いに消極的となったのである。しかしルターの思想はまったく異なると本書は主張する。「キリスト者の自由とは、（キリストによって義とされるという）受動性における自由であり、その積極的展開における愛と奉仕にはかならない」、それが徳善先生の解釈である。信仰は愛と奉仕の行動となる。

ところで、従来「信仰から信仰へ」（ロマ二・一七、口語訳）と訳されていたパウロの言葉が、近年の『聖書協会共同訳・聖書』では、「真実により信仰へ」と改訳された。改めて「信仰」とは何かが問われる。本書で先生はルターの信仰理解を解説しつつ、信仰とは神の真実から起こる出来事であると説かれた。深い信仰理解であり、上記の改訳に一脈通じるところがあると筆者は思う。

立山 忠浩（所員、JELC 都南教会牧師）



『マルチン・ルター——生涯と信仰』（教文館、二〇〇七年）

『マルチン・ルター 生涯と信仰』は、徳善先生がFEB Cキリスト教放送局で話された内容（一九九一年～一九九二年放送）の書籍版である。随所に、「ルター博士」である徳善先生しか知りえないエピソードが満載である。だれもが読める分かりやすい内容になっているが、生涯をかけて取り組まれた確かな研究成果に基づいており、ルターその人の高い関心と尊敬も伝わってくる。それゆえの安定と安心の良書である。そういった本は意外と多くはない気がする。

とりわけ興味深いのは、「晩年のルターの健康」（第二二話）である。ルターの後半生は、さまざまな病と心身の不調に見舞われ、それとの闘いでもあった。あるときはめまいで説教を中断し、またあるときは大学に行く途中、路上で倒れていた、というのだから尋常ではない。しかし驚くべきは、改革運動の重大事、聖書講義、そして讃美歌の創作がこの時期に重なっていることだ。ルターその人もすごいが、証しされているのは、ルターの内と外に働く神の恵みとその力についてである。そうした事態の中で神が共にいること、何事かを成してくださることへの期待と信頼が、ルターから徳善先生へと結ばれている線になっている。

全一二話を通じたルターへの集中は、「ルターにとどまらないで、ルターを突き抜けて、ルターも指差している私たちのキリストに目をしっかりと留める」ところに行き着いている。それはルターの生涯と信仰の証しであり、それを語り記された先生の証しと受取りたい。それは今を生きようとする人たちへの励まし（エール）にもなっている。深く感謝したい思いである。

宮本 新（所員、ルーテル学院大学・神学校教員）

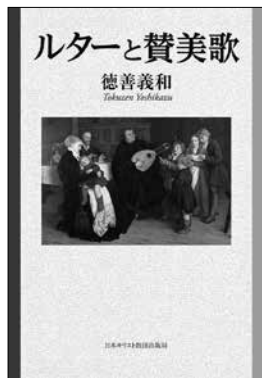


『ルターと賛美歌』（日本キリスト教団出版局 二〇一七年）

本書は、宗教改革五百年の二〇一七年に出版されました。ルターの賛美歌に二通りの訳が示され、原詩に忠実な訳と、歌うための訳が「口語」でなされています。ルーテル教会が五百年を記念して、日本の歌集になかったルターの全賛美歌を歌える形で紹介するのが目標の一つの『教会讃美歌補分冊』は、本書の訳詞が土台となります。ただ、曲はルター時代の古色蒼然(?)としたままの再現であり、これからは、ルターの歌詞に私たちの新しい曲を付し、現代の「会衆の歌」を生み出していくのが私たちの課題です。

ルターの賛美歌は、『教会讃美歌』に一七曲、『讃美歌二一』には二〇曲が収録されていますが、今まであまり詳しくは解説されていません。日本でも古くから歌われてきた、いわゆる《神はわがやぐら》(Ein feste Burg ist unser Gott)が代表的なもので、これが宗教改革の旗印の歌となったのは後代のことです。ルター本来の意図とは異なることや、また、近現代ドイツにおける誤用(ナチスの行進曲的使用等)など、知られざるエピソードが満載です。殊に、従来の日本の歌集における二節の「誤訳」(「われと共に」(讃美歌二一)の指摘は的確です。悪魔と戦うために「私たちに代わり、私たちのために戦うキリスト」が原意なのです。その他、カテキズム歌、家庭での歌、死を見据えた歌、伝統的な聖歌の翻案等、ルターの賛美歌が、いかに多彩で様々な用途のために紡ぎだされ、その後の「教会の歌」の方向付けがなされたのか、分かります。紹介されています。

松本 義宣 (研究員・JELC 東京教会牧師)



シリーズ「人間ルター」18

お喋りな人ルター

高井 保雄



中川浩之・画

ルターは大変お喋りな人だ。

現在残る百巻近くもある浩瀚なルターの全集中六巻を占めるのが、彼の食卓での談話をまとめた『卓上語録』だ。その内容は、神、悪魔、人間、国家、社会、教会、政治、経済、家庭、教育、更には同時代の人物批評等、極めて多岐にわたっている。

彼の食卓を取り囲んでいたのは、逗留客の王侯貴族、大勢の市の友人達、教授連、下宿の神学生達、若くして死んだ実の姉妹の子供達や自分の家族等で、常に二、三十名に及んだ。それがルター家の日々の食卓風景だった。ところでルターは大部の卓上語録を残した希代のお喋りと言つてよいのだが、若い頃からそうだったというわけではない。

青年時代は大学で法学を学ぶが、突如として修道院に入り、修道士となった。そこは食事の時も口をきいてはならない沈黙が支配する世界だった。

彼は極めて熱心な修道士だった。が、教会改革をすすめる中、修道制を批判、修道院の廃止、修道士の還俗や結婚を主張するに至った。

これに応じて多くの修道士が還俗、修道院を去ったが、何故か彼自身はひとり修道服を着続け、修道院に留

まっていた。

そんな折り、ルターの主張に共鳴した修道女達が女子修道院を脱走してルターの下に逃げ込んできた。当時は還俗した修道女の生きる道は殆ど結婚しかなく、ルターは彼女達の結婚相手探しに奔走した。

二年余りが過ぎて、九名の修道女達はあらかた嫁ぎ、最後にカタリーナ・フォン・ボラがひとり残った。彼女には意中の人がいたようだが成功せず、結局、ルターともう一人が最終候補となった。ところが、そのもう一人が固辞した。ルター自身は、当初あまり乗り気でなかったようだが、遂に決断、修道服を脱ぎ、結婚した。神の導きだろうか…。

沈黙の世界にいた元修道士と元修道女の結婚だったが、大当たりだった。家政に全く疎いルターに代わり、妻ケーテは領主から結婚祝いに贈られた元修道院の建物で下宿屋を開業し、庭を耕し、家畜を飼い、ビールを醸造し、大食堂を営む「博士夫人」となった。

ルターは彼女を「女主人」、「女子修道院長」、「私のケツテ(鎖)」などと呼びつつも、最大の愛と感謝を示している。このルター家が『卓上語録』誕生の母体となった。

(所員 JELC 引退牧師)

ルターの ことば

JELC 小倉・直方教会 牧師 森下 真帆

お子さんをキリスト教主義の学校に通わせている教会員の方が「子どもの学校で『神が罰を与える場合』についてレポートを書かせる課題が出ました。うちの子は『罰はない』という趣旨のことを書いているみたいです。」と話をされたことがありました。確かに、神の恵みとキリストのとりなしを信頼する限り、神様があれこれの罰を用意して私たちを待ち構えているというのは信じづらいことです。私はお子さんの主張を応援しました。

しかし、私たちは神の恵みによって赦され救われているけれども、その場合罪はなくなるとして、罪に伴う罰もまたなくなると断言できるのだろうか…ということが気になっていました。そんな中私はルーテル世界連盟主催の「第 24 回牧師のための国際セミナー」に参加することになりました。昨年行われたこのセミナーは世界中の牧師がオンラインで集まってルター神学を学ぶよい機会、私はその場でルターが罰についてどう考えていたかということを質問してみました。

キリストはそうした愛に迫られて、
あなたの良心とあなたの罪の過酷な重荷を負いたもうのである。

『キリストの聖なる受難についての説教』(1519)

回答してくださったのは Sarah Hinlickey Wilson 先生で、彼女によれば①私たちの受けるべき罰はすべてキリストが担ってくださったのでなくなっている。②その上でルターは悔い改めに着目している。罪の自覚がある人は悔い改めるわけだが、悔い改めは内省の痛みを伴う苦しい行為であるので、ルターは悔い改めそれ自体が罰に匹敵すると考えていた。③神からの罰はキリストによって存在しなくなったけれども、社会からの罰は存在し続ける。ということでした。

この回答を受けて、やはりキリストは私たちの罰をも担ってくださっていたのだ！という喜びに満たされるとともに、悔い改めが罰に匹敵すると考えたルターの牧会的視点の鋭さを感じました。私たちは罪を犯し、悔い改め、内省の苦しみを味わいます。しかしその苦しみはキリストが私たちを救ってくださっているという安心の上で受ける罰のようなもの、悔い改めのしるしなのです。

ドイツのユネスコ世界文化遺産に、共にルター都市と称するアイスレーベンとヴィッテンベルクのルター記念建造物群(1996 年指定)がある。紹介する切手は、2009 年にドイツと国連から共同発行されたルターの世界遺産を取り上げた、同図柄の切手のうちのドイツ発行のものである。図柄には五つの建物が描かれており、左から右にかけてルターの人生を追いかける構成になっている。

左端の建物は、アイスレーベンにある、ルターの誕生した建物である。これは、旅行者の一時宿泊所のようなものであり、父ハンスが職探しのためアイスレーベンに滞在中、ルターが生まれたのである。

二番目の建物は、ヴィッテンベルクにあるルター・ハレ(ルターの家)である。もともとは修道院だったが、結婚を機にルターに贈呈されたものである。

三番目は、ヴィッテンベルク城教会である。「95 ヶ条の提題」を掲示したと言われる扉部分が描かれている。

四番目は、ヴィッテンベルクにあるメランヒトン・ハウスである。メランヒトンは、宗教改革運動におけるルターの盟友であり、ドイツの教育の父と呼ばれる。

右端はアイスレーベンのルターの死んだ家である。病身を押してマンスフェルト三兄弟の仲裁のため、この町を訪れたルターは、心臓発作のためこの家で亡くなった。奇しくも自分の生まれた町で生涯を終えることになった(最終回)。

切手に見るルター ③⑥

世界文化遺産(二)

JELC 大分・別府・日田教会牧師

野村 陽一





シリーズ

「ルターとバッハとわたし」



切り絵：小嶋三義

深井 李々子

オルガンは教会と共にあった。見えないところから鳴り出すその音は、会堂いっぱいに響きわたる。荘厳で神秘的で地上から天国へと結ぶオルガン。このオルガンに魅せられて、東京ルーテルセンター教会の二階のオルガン席に座って、五〇年以上もオルガンを弾きつづけてきた。

東京カテドラルのオルガンの夕べが始まったのは一九七〇年、当時の日本にオルガンは数十台しかなかった。その後まもなく、ICUに大オルガンが、大森めぐみ教会にフランスの楽器が入り、それぞれ連続演奏会が催されるようになった。その頃音大生であった私は、第一日曜はカテドラル、第二は大森、第三はICU、オルガンという磁石に引き寄せられて歩きまわった。これから日本にオルガンを中心に何かが生まれようとした七〇年代、見ても聴くも新鮮であった。オルガンの音をきいただけで、打ち震えるような感動を覚えた。オルガンに導かれて

バッハとの新しい出会いの旅が始まる。盲目のオルガニスト、ヴァルヒヤのバッハオルガン全集のLPレコードを擦り切れるほど聴いた。不朽の名曲「パッサカリヤ」とともに、コーラル作品に心打たれた。言葉を音楽にして伝えるオルガンコーラル、私は選曲

に困ったときはバッハに相談する。教会の暦は待降節から始まる。毎年、待降節第一主日に前奏として演奏するのがバッハの「いざ来ませ、異邦人の救い主」(教会讃美歌第一番今こそ来ませ)。この讃美歌の源はラテンの語の讃歌で歌詞は教父アンブロジウス作、遠く四世紀に遡る。十六世紀にルターがドイツ語に翻訳してドイツ語の讃美歌にした。コーラルはソプラノに置かれ、原型をとどめないほどに装飾され、救い主を待ち望む夢幻的な美しさを放つ。ペダル八分音符の動きは一步一步近づいてくる救い主の足音のようにも聞こえる。

バッハの音楽には不思議な力がある。オルガン音楽の歴史的宿命ともいえるべき宗教性が最も徹底した形でバッハの音楽には宿っている。それは単なる宗教的装いでなく、安易な信心でもなく、存在感を曖昧にする神秘性をも納得させる合理性があり、人間に健康な快楽を与える現実性がある。しかも人間の存在に根底から働きかけてくる超越的な何ものかがある。

私はこれからも教会でバッハと共にオルガンを弾きつづけていきたい。

(ルーテル学院大学講師・東京ルーテルセンター教会オルガニスト・JELC 蒲田教会オルガニスト)



ルター研究所主催 クリスマス講演会報告 「ルターの聖書翻訳 五〇〇年」

高村 敏浩

昨年二月一日(日)の午後、どの要素が役割を果たすということと前年と同じくZoom(Webinar)や、現代社会が提示する問いかけを用いて、ルター研究所主催の講演会を行いました。五〇〇年前の一五二二年、マルティン・ルターがドイツ語の新約聖書を翻訳、出版したことを、二〇一七年の宗教改革五〇〇年(初版が一五二二年九月、第二版が同年十二月)したことから、テーマを「ルターの聖書翻訳五〇〇年」としました。講演会は三部構成で、最初に高村が、写本聖書を中心に、印刷聖書へと移り変わる時代の聖書、つまりインキュナブラ(一五世紀中頃の活字印刷術発明から一五〇〇年頃までの活字本)の聖書を紹介する講演「中世後期の聖書世界」をしました。続いて、バッハ研究家の加藤拓未さん(羽村幼稚園長、大森教会員)が解説する「ルターのクリスマス讃美歌」(演奏付き)、そして最後に立山忠浩牧師、李明生牧師、安田真由子さん(ルーテル学院講師、都南教会員)によるシンポジウム「聖書、ルター、翻訳、そして現代」という内容でした。シンポジウムでは、近年二〇一八年に出版された聖書協会共同訳聖書を含め、翻訳の過程で、神学や文化や時代の価値観な

なお講演は、二〇二一年のものも含めて、ルーテル学院のホームページ(ルター研究所アーカイブ)からご覧いただけます。





研究所ニュース

コロナ、ウクライナ、そして国内に目を向ければ急速に進む少子高齢化。社会全体も教会も、おおいに揺さぶられ続けています。教会の未来は？キリスト教の未来は？ルターが教えてくれた信仰の未来は？……。

そこで今年の研究所の年間研究テーマを「宗教の神学、その後」としました。難しいテーマです。しかし、ルターの時代も、中世から近代へと激変する時代でした。ルターを研究し学びつつ、教会や時代や自らの信仰の在り方を考えてゆきたいと思っています。

●八〇号記念号

一面に記した通り、今号で本紙も八〇号となりました。二年後の二〇二五年にはルター研究所も四〇周年を迎えます。充実した歩みを続けたいと願っています。

●徳善義和先生召天

徳善義和先生が、一月三日に亡くなられました。先生は初代所長として、ルター研究所を開設し育ててこ

られました。その大きなお働きに心より感謝します。今号は徳善先生の追悼号となります。二〇五面をご覧ください。

●クリスマス講演会

昨二〇二二年二月一日、全国オンラインで「クリスマス講演会」を開きました。テーマは「ルターの聖書翻訳五百年」でした。七面の報告をご覧ください。

●『ルター研究』18巻

ルター研究所の紀要『ルター研究』18巻が昨年一〇月に発行されました。一〇本の論文が収録されています。下段をご覧ください。

●公開講座

二〇二三年度は、前期「ルターの生涯」(担当：江口)、後期「ルターの神学」(担当：江口)です。昨年同様、受講対象者は神学校・学院生です。

●牧師のためのルター・セミナー

牧師を対象にルター・セミナーを五月下旬に開く予定です。

●「切手に見るルター」

シリーズ「切手に見るルター」は今号をもって終了です。二〇〇三年の四十四号より、実に二〇年間、野村陽一先生が貴重なコレクションの中から題材を選び執筆して下さいました。毎回、こんな図柄の切手があるのと、楽しく読ませていただきました。ありがとうございました。

●献金の感謝とお願い

ルター研究所への、皆様のご支援と献金、心から感謝します。

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金(二〇〇万円)と皆様のご支援(約一五〇万円)で成り立っています。二〇二三年度のルター研究所への指定献金は、一四四万六八〇〇円(二月末)でした。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金(ルター研究所)」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さまのご理解とご支援をよろしくお願い致します。

(所長 江口再起)

「ルター研究」第18巻 (ルター研究所紀要、リトン発行)

特集 (1) ルター『マグニフィカート講解』500年

- ・江口 再起 「待つということ — ルター『マグニフィカート講解』によせて」
- ・滝田 浩之 「ルター『マグニフィカート』紹介」
- ・多田 哲 「ルターとマリア」
- ・安田真由子 「連帯から生まれる社会変革のことば—マリアの賛歌のフェミニスト批評」
- ・加藤 拓未 「J.S. バッハ『マグニフィカート』の諸問題(上) — その成立をめぐる」

特集 (2) ルターと戦争

- ・高村 敏浩 「よい市民、よい隣人であれ — 『軍人もまた救われるか』を読む」
- ・立山 忠浩 「『トルコ人に対する戦争について』を読む」
- ・江口 再起 「戦争を神学する — ルターとボンヘッフアー」
- ・宮本 新 「教会は何を信じ伝えるのか? — UMG とその構造的理解を手掛かりに」
- ・石居 基夫 「ルターの聖餐理解と現代の教会 — アメリカ福音ルーテル教会“UMG”に学ぶ」

*「2200円(本体+税)+送料」でお分けします。(お申込み先) ルーテル学院大学 事務管理センター TEL: 0422-31-4611 (月~金 8:30 ~ 17:00)

ルーテル学院・ルター研究所

三鷹市大沢三ー一〇一
電話 〇四二一三ー一四六一

発行責任: 江口 再起 (所長)

e-mail: Luther-studies@luther.ac.jp